

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成31（2019）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 東京大学（教授・合田 圭介）

研究交流課題名 パンパシフィック・セレンディピティラボ

評価結果（総合的評価）

- | | | |
|---|---|--|
| | S | 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| ○ | A | 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| | B | ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| | C | 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題の「Pan-Pacific Serendipity Lab」の立ち上げは順調であり、コロナ禍にも関わらず、コーディネーターをはじめ、多くの研究者らが多大な努力を払って本課題を進めていることが十分にうかがえる。研究交流やネットワーク構築の多くが中止となったことは残念ではあるが、オンサイト、オンラインのメリット・デメリットを考慮しながら、国際研究交流の最適なやり方を模索しつつ進めてきたことは評価できる。

研究成果として、本課題の中核となるインテリジェント画像活性細胞選抜法（IACS）の改良に関するインパクトの高い論文を複数発表していることは、世界的水準の高い研究が実施されていることを示している。これまでに4カ国の連携による共著論文があるが、後半に向けて、それ以上の連携による成果がさらにあがると良い。

若手研究者育成の面では、コロナ禍においても若手主体のオンラインワークショップを開催していることから、若手育成に尽力している様子がうかがえる。若手研究者がポジションを獲得している点、学生・若手研究者が国際発表で学会賞受賞という成果をあげている点に加え、日本の若手研究者がコーディネーターを介さずに海外拠点の若手研究者と自主的に国際共同研究を企画するボトムアップ的な活動をおこなっていることは、若手育成の効果が上がっていることを示している。

現在は、PI層（進捗状況報告書p2の図表）に女性研究者がいないので、参画する女子学生・若手女性研究者が将来このようなプロジェクトのリーダーとなるよう育成することを期待する。研究面ではIACSの技術的な深化と適用範囲の拡大について、どちらも期待通りには進んでいるが、より想定以上のものができるか、発見できるか期待したい。また本課題の終了後の継続性について、継続して拠点を運営していくための体制についても具体的に考慮していただきたい。